

[成果情報名] 新品種「早秋」を用いたカキの早期出荷

[要 約] カキ極早生の新品種「早秋」を用いた加温栽培では露地栽培より果実品質が向上する。収穫時期は「前川次郎」を用いた場合に比較して 50 日程度早くなるため、1 月下旬以降の加温開始で 8 月上旬からの早期出荷が可能である。

[キーワード] カキ、「早秋」、早期出荷

[担 当] 静岡農林技研・果樹研セ・落葉果樹科

[連絡先] 電話 053-428-3141、電子メール kajyu-rakuyo@pref.shizuoka.lg.jp

[区 分] 果樹

[分 類] 技術・参考

---

[背景・ねらい]

早期出荷による有利販売を目的に、「前川次郎」を利用したカキの加温栽培が行われているが、収穫までの日数が露地栽培より遅延し、重油価格が上昇しているため加温開始時期が遅くなり 9 月以前の出荷が困難な状況にある。このため、極早生で比較的品質の優れるカキ新品種「早秋」を早期出荷作型に用いた場合の適合性について明らかにする。

[成果の内容・特徴]

- 1 「早秋」は露地栽培では 9 月下旬に収穫される。「前川次郎」と比較して果皮の着色は優れるが、果実はやや小さく汚損果の発生が多いことが問題である（表 1）。
- 2 加温栽培では汚損果の発生が殆どみられなくなり、果実重が増加する。収穫時期は、「前川次郎」では露地栽培より成熟日数が長くなるが、「早秋」ではその傾向がみられないため、50 日程度の違いになる（表 2）。
- 3 1 月下旬からの加温開始で最低気温を 20℃で管理した場合は 7 月上旬から、15℃で管理した場合は 8 月上旬の出荷が可能である（表 3、図 1）。

[成果の活用面・留意点]

- 1 9 月以降は「前川次郎」の早期出荷、その後は複数の品種での露地栽培と組合せて収穫・出荷期間の拡大を図る。
- 2 奇形果の発生が多いので摘蕾時に 15cm 以上の結果枝では、2 蕾程度を残し果形を見極めてから摘果を行う。

[具体的データ]

表1 ‘早秋’及び‘前川次郎’の露地栽培での収穫時期及び果実品質<sup>z)</sup>

	早秋	前川次郎
収穫盛期	9月27日	11月9日
成熟日数 <sup>y)</sup>	135	178
果皮色 <sup>x)</sup>	6.0	5.1
果実重(g)	208	251
糖度(Brix)	16.6	17.5
汚損果発生率(%)	45	24

注)z:平成10年～14年の落葉果樹研究拠点での調査の平均値  
y:満開日から収穫盛期までの所要日数  
x:果頂部のカラーチャート値

表2 加温栽培を行った‘早秋’及び‘前川次郎’の収穫時期と果実品質<sup>z)</sup>

品種	平均収穫日	成熟日数 <sup>y)</sup>	果実重(g)	果皮色 <sup>x)</sup>	糖度(Brix)
早秋	7月29日	139	250	7.3	14.8
前川次郎	9月18日	192	283	5.1	20.8

注)z:2007年1月25日加温開始、7月4日まで最低気温18℃で管理  
y:満開日から収穫盛期までの所要日数  
x:果頂部のカラーチャート値

表3 カキ‘早秋’の加温栽培における最低気温が収穫までの所要日数に及ぼす影響

最低気温		平均収穫日	加温開始～収穫までの日数
加温開始～開花(A)	開花～加温終了(B)		
20℃	20℃	7月17日	168
	15℃	7月23日	174
15℃	20℃	7月26日	177
	15℃	8月9日	191
分散分析		(A)	**
		(B)	**
		(A)×(B)	*

注)z:2009年1月30日～6月8日まで加温管理

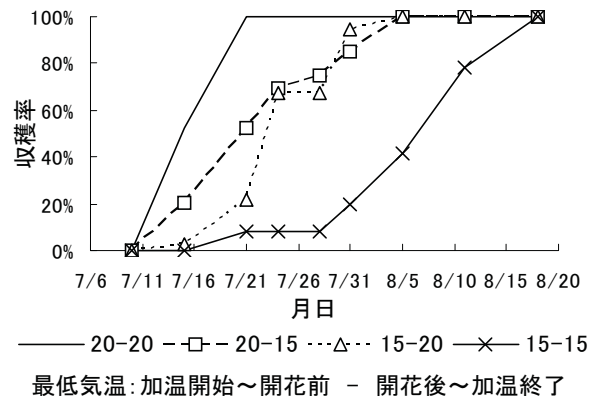


図1 開花期を境とした最低気温の違いがカキ‘早秋’の時期別累積収穫率に及ぼす影響

[その他]

研究課題名：施設園芸における高度環境制御利用等による高生産システム術の確立  
落葉果樹の施設栽培による新商材、新作型の開発

予算区分：県単

研究期間：2007～2009年度

研究担当者：鎌田憲昭